法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

桐壺の院

益田, 勝実 / MASUDA, Katsumi

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
2
(開始ページ / Start Page)
17
(終了ページ / End Page)
22
(発行年 / Year)
1959-03-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00018959

桐壺の院

益田勝実

光源氏の物語前史

皇子光は全宮廷の祝福を浴びて生まれ出たのではなかった。両親たちだけの期待が、かれを待ちもうけていたのでもなかった。かれの両親、桐壺の帝と桐壺の更衣は、自分たちの愛情を貫こうとするのに精一ぱいで、やがて生まれ出る子どもの将来を空想してみる余裕を持たなかったのである。

紫式部は、光の誕生を描くにあたって、多かれ少かれ、かならず宮廷や外戚のとりどりの願望が皇子に注がれる、当時のならいにそむいて、そのような描写を一切しなかった。それは、この古代作家の筆が幼なかったためではない。かの女は、この皇子の誕生を、そのような人々の待望につづくものとして描くかわりに、親たちの全後宮の非難を浴びて貫こうとする愛情のための苦悩につづくものとして、描いた。「とりたてて、はかばかしき後見しなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり」という母更衣の描写につづけて、「さきの世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ」と、実に簡略である。作者が「さへ」という助詞を用いて光の誕生を物語るのは、光の誕生が、ここでは、親たちの悲しい思い合いの歴史の一つの深まりの契機としてつかまれていることを、あきらかにする。かれの小さな肉体が生まれ出ることを物語るために、親たちの悲恋が描かれたのではなく、(帝と更衣の物語が、かれの出生のとたんに結着をつけるのではなく)、母更衣が負う人々の恨みをまし、死にまで追いやる大きな契機の一つとして、光の出生は、描かれた。そして、親たちの貫きおおせなかったその愛情の歴史を継ぐものとして、主人公源氏の生涯の物語は始められる。光という人間の誕生を語るために、作者は、かれの肉体の誕生をこともなげに叙して、しばらく廻り道をする。主人公の登場がその誕生の物語によってなされる古代物語の伝統的な方法の中では、主人公の父母を語ることは、主人公の系図を明らかにすることであり、系図を明らかにする以上に、父母が役割を負うことはなかったようである。たとえば、「昔、式部の大輔左大弁かけて、清原の王(ありけり。)皇女腹に男子一人持たり。その子、心のさと

きことかぎりなし」(『宇津保物語』(俊蔭)) というふうに清原俊蔭の出生は物語り始められる。『宇津保物語』では、俊蔭の出生Ⅱ登場を物語るために、父と母の名が語られたが、その父と母がいかに生きたかは、作者のかかわりあわないことがらであった。同じ物語の吹上の巻の源涼の出生も、「かくて紀伊の国牟婁の郡に、神南備の種松といふ長者、かぎりなききよらの王にて、ただ今国のまつりごと人にて、かたち清げに心つきてあり。それが妻にては、源のつねありとし申ける大納言の娘、よき婿取りなどしたりけるを、ほどもなく、親も夫も失ひて、世の中に住みわづらひたるを、種松たばかり取りて、その腹によき娘一人ありけれど、内裏の蔵人仕うまつりけるが腹に、源氏一所生まれ給ひけり。母、生み置きてかくれぬ。帝、知ろしめざす、母奏せずなりにけり。」(吹上の上)と語られる。そして、涼がかえりみられない帝の落胤であるという事実は、その後、何らかの人間性とかかわりあうことはないのである。それらに対して、仲忠の誕生に先立つ、その父母、藤原兼雅と零落した俊蔭の娘の物語は、父母たち自体のめぐりあいとその後の悲しいへだたりを、作者が力をこめて物語っている点において、大きな違いがある。しかし、それも俊蔭の娘の数奇な運命が物語られるのであって、そうして誕生した仲忠の人間の質にかかわりあうのではない。古代最初の長篇物語が、俊蔭からその娘、仲忠へと、世代から世代へと展開して行く物語の形式を探っていることは注目すべきで、そのような家の系譜の物語という形式を、『源氏物語』もまた踏襲したのであるが、それにもかかわらず、両者の間に大きな違いがある。『源氏物語』の後につづく、『狭衣少将物語』や『浜松中納言物語』が主人公の一代を語って、前の世代から次の世代におよぶ物語でないのは、偶然的な事実ではなく、物語が、氏族伝承的な発想を媒介にして、はじめて長篇たりえた時期の後に、そういう発想上の制約から、作者たちが自由になった時期がつづいたことを示している。その意味では、『源氏』は、それ以後の物語よりも、はるかに『宇津保』に近い。しかし、同時に『宇津保』との間には、物語の方法の上で、この上もなく深いクレバスが横たわっている。紫式部は、光をその親たちを、もっと内的に、血のつながり以上のもので結びつけたのである。長篇物語の軸として横たわるものが単なる系譜や時間ではないことを打ち出した、といってもよいだろう。

祝福される環境を持たない出生にもかかわらず、皇子は「世になく清らなる、玉のをのこ御子」「光る君」であった。有力な生家の結婚政策が天皇を緊縛していて、桐壺の帝の溺愛が遂には擁護者もなく、身分も低い、桐壺の更衣を殺すことになる——純愛がすなわち殺人でしかない——古代宮廷社会の宿命を背負って、その暗い出生の事情にそむいて、悲恋の子は光り輝いていた(1)。光源氏の、人を愛し、愛するがゆえに悩む業を負った生涯には、かれに先立って進む先行者たち——帝と桐壺の更衣の物語が、前史として横たわっていたのである。六条の御息所の生霊にとり憑かれた葵の上の死の苦悶の中で生まれた、光の嫡子夕霧。光の子として柏木の衛門督の子を生む、女三の宮の秘密の懐悩にかげっている、薫の出生。かれらの性格と生涯の歩みが、その出生に先立つ秘められた歴史とこの上なく深くかかわりあわねばならない、とする『源氏物語』の作者は、それに先立って、光にそのような宿業を負わせることをおそれていなかった。いわば、『宇津保物語』の長篇の方法ときびしく区別されるべきものが、この作品には首巻から横たわっているので

ある。しかも紫式部が、人の子の出生とそれに先立つ歴史について、そのように宿業を見る時、かの女は、仏教の、一人一人が前世からの因縁を負って生き、さらに来世では、めいめいがこの世で積んだ諸因の果報を生きねばならない、という観念をはるかにつきぬけてしまっていた。親の業を受けて、子が生きる。それは、もはや仏教の教えたものではない。仏教の教えを媒介にしながら、かの女がみずから到達した文学者としての現実認識であろう。桐壺の巻が、光源氏の生涯に先立つ、親たちの悲恋から描かれなければならなかったのは、そのような作者の個性とかかわりあうことであった。

桐壺の巻が他のどこの巻のつぎに書かれたか、一時に現在の形にならず、第一次のものにさらに書き加えられたものではないかなど、この巻をめぐる論議は多い。が、一方で、この巻が作者によって『源氏物語』の首巻として構想され、執筆されたことの意味の探究も必要であろう。なぜ、『源氏物語』は桐壺の巻をいただき、親たちの悲恋の物語からはじめられなければならなかったか。桐壺の帝と桐壺の更衣の物語を、光の系図を語る前置き以上に、深く描くことによって、紫式部は、光の血の系図と同時に、生き方の系図を語ろうとしたのである。もちろん、親の因果が子にたたる、という非仏教的な因果の俗世間的な認識は、古代貴族社会にもあっただろうが、それを、生きていく悩みを人間が世から世へ受けついでいる、という考えに深め、この物語文学展開の支柱にすえたのは、式部の個性的な現実認識であろう。そして、それが、前期物語文学の伝統であったできごとを語る物語を、できごとのこころを語る物語に飛躍させたのである(2)。それが、光源氏の物語の中で、次の世代夕霧の人生が語られ、光源氏の物語の後につづいて、匂や薫の性格が語られる可能性をもたらしたのであろう。その意味では、桐壺の巻がすでに宇治十帖を、萠芽以前の何かとして、はらみえていたのだった。

光源氏が自己の生涯に先立つ前史を負うということは、そのかぎりにおいて、古代最初の長篇物語『宇津保』とも、本質的な違いを持つ。俊蔭から俊蔭の娘、さらに仲忠の代におよぶ物語の展開と、桐壺の帝から光、光からその子どもたちの代におよぶ物語の展開とは、外形的には似ていても、その展開の原動力となるものを異にしている。できごとの外的連関を原動力とする立場と、できごとの内的連関を原動力とする立場の違いといえよう。『宇津保』の琴をめぐる宿世(すくせ)は、『源氏』の純愛を求めてもだえさまよう宿世のように、人間存在の内部に深くつき入った文学の方法ではない。式部は自己の個性的な方法でその飛躍をなしとげた。問題は、第一には、それが、貴族階級子女の慰みとしてしか考えられていなかった、当時の物語文学の中で行われたことであり、第二には、『宇津保』の伝統的方法の強い制約を受けながら、それを踏み切ってなされたことである。

『宇津保』の俊蔭の巻は、藤原の君以下の巻々に対して、特別な位置を持っている。この巻は仲忠の出生を物語る巻であるが、仲忠の琴の才能の根源を語る必要以上に、祖父俊蔭の物語が詳しく語られており、藤原の君以下の巻々が、仲忠中心よりも貴宮(あてみや)中心となっているから、やや游離した、遠い昔の物語としての首巻を形成している。このような最初の長篇の首巻が成立するには、たとえば、俊蔭の巻がはじめから長篇の首巻としては出発しなかった、というような事情が伏在しているかも知れない。が、それにしても、それを

首巻として以下の巻々が書きつがれ、全体として不自然にならない、という意識はあったのであり、その意識がなければ、構想の延長ということもありえないのである。うちつづく巻々の前に、一巻の上つ世の物語。それは、作者の意識の底に横たわっている、長い長い物語を語りはじめようとして、まず、それに先立ついにしえの物語からはじめねばすまない発想の型にかかわっていることらしい。『源氏』の首巻も形式的には、同じ構造をもっている。しかし、作者は『宇津保』の主人公仲忠の生涯には、時間的継起の上での前代、才能をめぐる因縁としてしか働きかけえなかった物語の冒頭を、人間同志の内的な連関、人間性の歴史についての問題提起の方法として捕え直し、以下の物語と緊密に結びつけたのであった。

光の父

桐壺の巻の前半は光源氏の物語の前史であり、光は、政略結婚のただなかで、純愛を求めて生きようとする桐壺の帝の皇子である、という出自を決定的に負っている。だから、桐壺の帝がどんな性格の人物として設定されているかは、源氏物語にとって、重要なことがらの一つであろうに、なぜか、深く穿鑿されることが少い。作者は桐壺の帝を無性格な人物としても描かれなかったし、中庸をえた人物としても描かなかった。愛情に耽溺する人――かれは、同じ『源氏』が描いた朱雀院や冷泉院とはまったく違った型の帝王であった。「朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、うらみを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれなるものにおもほして、人のそしりをもえはばからせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり」と描かれる、かれの更衣に対するひたぶるな愛情は、後宮の一人一人の后妃の後に、かの女たちをよりどころとして権力をふるおうとしているそれぞれの家があり、逆にその家の権勢がかの女たちの後宮での位置を左右してもいる。実際の宮廷を念頭において考えれば、むしろ、わざわいをおこすもととしか考えられない。「唐土にも、かかることのおこりにこそ、世の乱れあしかりけれと、やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしも引き出でつべうなりゆくに……」――これという後見者のない更衣を溺愛して、右大臣家の弘徽殿の女御をはじめ、それぞれ権勢の家から入った女性たちをかえりみない、帝に対する最上層貴族たちの不満は、次第に穏当でない気分を醸成する。それは、家々が外戚の地位にありつきえなくなる大問題でもあるからである。そして、玄宗皇帝が楊貴妃と遊び戯れて政治を忘却したために、安禄山の乱が勃発した例を引き出し、更衣に同じように「国を傾けるもの」というレッテルを貼りつけ、その存在をうたがおうとするきざしでさえあるのだが、帝はそういう政治的情勢に制約されず、ひたすらにかの女を愛しぬく。帝は結婚が政略である状況からひとり脱して、更衣への愛情にすべてをかけている。かれには、「漢皇、色を重んじて傾国を思う。御宇多年、求むれども、得ず」(「長恨歌」)、そして遂に楊貴妃を手に入れた玄宗皇帝のような、嬌慢な王者のふるまいは感じとれない。また、作者も、更衣の美貌についてはまったく語らない。紫式部は、当人同志には前世からの縁かとさえ感じられる、精神的なふたりのつながりあいを強調しているのである。かりにも、他の美女の新出現によってトラブルが惹起されうるような関係で、帝と更衣の愛は描かれていない。むしろ、上層諸貴族に

とって、後宮の美女を物色して愛する王者の嬌慢は、桐壺が更衣をひたすらに愛したことのように、危険な行動ではないだろう。しかし、ひたすらに、権門の出でない一人の女性の魂とふれあうこと、他のすべての女性をかえりみなくなることは、帝王として、外戚政治をたてまえとする摂関制下の宮廷のしきたりやおきてにそむくことである。そして、帝の更衣を愛する行為にそういう意義がふくまれている、というばかりではない。かれの行動は、現実に宮廷のしきたりやおきてをうち破る面も持っている。「(光の)母君、はじめよりおしなべての上宮仕へし給ふべききはにはあらざりき」。それであるのに、帝は、更衣という夜のおとどにのみさぶらうべき相手の身分を顧慮もせず、女官のように昼のおましにもはべらせて、上宮仕えさせるのである。「おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆえある事のふしぶしには、まづまうのぼらせ給ふ。ある時には大殿籠りすぐして、やがてさぶらはせ給ひなど、あながちに御前去らずもてなさせ給」うたので、更衣の地位に比して「おのずから軽き方にも見え」た、と作者はいう。どんなに愛しあおうとも、二人がたえずつれそって、家庭らしい雰囲気の中で暮すということは、帝王の生活では望んではならぬことであった。が、長い年月の伝統を負って固定してしまっている、この宮廷内部の制度に対して、桐壺の帝は剛毅でない反逆者となった。かれは、後宮の制度を更衣への純愛のためにつきくずすが、それが形を変えて、かれにでなく、更衣にはね返ってくることを予測できないでいる。更衣の没後、帝が「世にいささかも、人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじきの人のうらみを負ひしはては、かううち棄てられて……」という述懐を靱負の命婦の口からは、更衣の母に聞かせるが、「世にいささかも、人の心をまげたることはあらじと思ふ」生き方をしなければならない摂関制下の帝王の身でありながら、すべてが以前からの形式の墨守踏襲で固まっている世界で、桐壺の更衣を時を分かたずはべらせようとすることは、人々を驚かせ、その刺戟だけで、更衣に対して反感を抱かせるに充分なことだった。

宮廷のしきたりの壁の堅さについては、たとえばこんな事実がある。光孝天皇の治世にかぎって、内宴の際の天皇の陪膳役を更衣に務めさせていた。しかし、天皇が退位し、代って、宇多天皇が即位すると、関白基経がさっそくその廃止を新天皇に奏して、采女と交替させてしまったのである。『宇多天皇御記』によると、「太政大臣朕に書を送りていはく」云々と、基経が、天皇にそのことのために親書を送る、という特別な方法を用いていることがわかる(『同記』仁和四年正月二十一日条)。元来日々の陪膳は采女の役であり、内宴もまた以前にはそうであったからである。もとより、更衣の側からすれば、天皇の妻妾の地位より低い仕事で、思わしくないし、摂関家の側からすれば、中宮や女御の競争相手である、更衣が後宮から前殿へ進出することは脅威である。こうして強力な関白の奔走によってはばまれ、あくまで、天皇の身辺の世話を多数の女官で細分化して荷う、律令的な状態が守られようとしたわけである。桐壺の更衣が帝の生活の昼夜両面をおおい尽くすことは、帝の希望であっても、およそ反宮廷的なしわざでしかない。ここでは、一人の男と一人の女が愛しあって終日の生活をともにしようとすることは、非常識なことであった。しかし、そういう世界の中で、かれは更衣とたえず

つれあっていようとする。桐壺の帝のそうしたひたぶるな傾倒は、帝自身に破滅としてはね返ってくるか、更衣に迫害としてふりかかってくるかの結果しか生まないだろう。そして、作者は、後者、更衣にふりかかる迫害のさまざまを語らねばならなかったのだった。が、事実は、迫害がさらに深刻になる前に、かの女の健康の方が急激に悪化していくことになる。その時にも、作者は、帝に、更衣の里邸への退出をはばませる。その結果、更衣は危篤に陥る。危篤に陥ると、内裏にけがれのおよばぬように、退出して息をひきとらせる非情なならいが、宮廷には厳として存する。それにも一人で抵抗している帝は、タブーと人間の自然な感情のあわいでもがく、みじめな男である。はじめ、仕方なく愛するものの退出を許して、輦車(てぐるま)の宣旨を下しながら、またたちまち取り消して、瀕死の更衣に、「かぎりあらむ道にも、おくれ先立たじ、と契らせ給ひけるを、さりとも、うち棄ててはえ行きやらじ」とかきくどき、「かくながら、ともかくもならむを御覧じはてむ」と決心する帝であった。しかし、周囲のものに反対されて、更衣の死を見とれないかれ。その退出の日の夜中すぎ、里邸で遂に更衣は生命絶えた。式部は、桐壺の帝に、明確に一人の人間的欲求と帝位との矛盾にもがく人物、非宮廷的性格を設定し、かれをこの長篇の起点にすえようとしている。

「つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御志を思ひ給へられはべる」と更衣の死後、その母がもらしたことは、桐壺の帝の本質をこの上なくあらわしている。更衣の老母のぐちは単なる逆恨(うらみ)みではない。古代の宮廷では、天皇の愛情が純粋であればあるほど、愛されるものを苦しめる結果になる、という真相にふれえている面を持っている。作者が生みだした桐壺の帝の人間造型は、そのかぎりにおいて、型破りの帝王であった。光源氏をそのような人物の子として物語り、桐壺の院から光へ――世代から世代へと、真実な愛にひたされて生きたいと願える心を受けつぐ人間たちの像を、物語の世界に息づかそうとする作者は、それ以前に、そのような心の持ち主に共鳴しうる自己と、自己に先立つ同じような人間の、心と心の触れあいを、体験しているのでなければならない。単に血つづきというだけでない光の「生き方の親」を設定する心は、自己と自己に先立つものの生き方のぬきさしならぬ連続性を体験していなければならない。かの女のそういう人間の生き方の歴史の発見こそが、琴の因縁が、親から子、子から孫への物語の軸となっている、『宇津保物語』とちがい、真の愛情の探求に費される世代から世代への動きを描く、『源氏物語』の世界を成立させた原動力であろう。

（本学日文科講師）